

# <町史だより>



1945年8月15日。多くの尊い命が犠牲になった第二次世界大戦の終結から、70年を迎えます。「戦後70年」にあたり、戦争の歴史を振り返るとともに、平和への願いを見つめ直す機会としたいと思います。今月号は、20年前の広報あさひ「平成7年9月号」に掲載された空襲体験談を再掲します。（一部抜粋）

## 【空襲体験者の証言】

空襲警報が鳴る。灯火管制で電気を消して防空頭巾を被って防空壕へはいる。じっと我慢して警報解除になるのを待つ、どこの家でも防空壕が掘ってあり身の回りの品々、食料など確保して空襲に備えていた。昭和20年戦局が厳しくなり、日ごとに激しくなる空襲に怯える日々が続く、7月17日未明、桑名市がアメリカ軍B29爆撃機の空襲を受け大火災となり、夜空が真赤になっていたのを覚えている。大勢の市民が町屋橋の下へ避難してきました。怪我をして呻いている人、泣き叫ぶ子供など、悲惨さ、怖さを橋の上から見ていた。この時初めて縄生地内、真光寺西の上田や町屋川べりに焼夷爆弾や焼夷弾が投下されたが幸い人家には被害は無かった。

そして運命の7月24日、午前10時30分頃空襲警報が鳴るやいなや、南西の山の方面より東芝三重工場を目掛けて投下された爆弾が目標を外れて不幸に縄生の住宅地に落下、人家に多大の被害をもたらした。

ちょうどその日、警戒警報が入り学校へ行けなかった。姉の友達も学校へ行くのに迎えにきてくれたが家に戻ることもできず一緒に家の防空壕に避難していた。飛行機の爆音がしてきたやいなや耳を劈く轟音と大きな地響の連続で、地震のような大きな揺れが続いた。この世の終りかと思うぐらいであった。しばらくして静かになり、父が防空壕の外へ出たとたん、弟の家がないと叫んだ。我々も怖々飛び出して驚いた。爆弾で吹き飛んだ土や瓦のかけらが2～3cmも積り色々な物が飛んできていた。家の中は爆風で戸・障子が吹き飛んでいた。

自宅の防空壕から50mぐらいの所へ爆弾が落ち大きなすり鉢の穴があいていた。近所の人達が集ってきたが手の付けようがなかった。しばらくして兵隊さんや消防団の人がきて行方不明者の捜索が始められた。この爆弾で3軒の家が倒壊し6人の方が生理になり、子供2人は助け出されたが2夫婦4人の方が遺体で発見された。ちょうど牛小屋へ直撃を受け、牛が70mぐらい飛ばされ死んでいた。また4人の方は家の中にいて亡くなられたが、近くの防空壕に老人、子供達は入っていて難をのがれた。

皮肉な事に叔父の家は、家族全員が防空壕に避難して爆弾の直撃を受け、妻子6人全員死亡した。叔父は会社に出社していて難をのがれた。家屋の半倒壊は7件あった。住宅地へ6発落ち、3発は爆発、1発は不発弾、1発は半爆発、1発は爆発したかしなかったかわからなかった。軍隊が何日か来て調べたが見付けられなかった。

Y家に落ちた不発弾は、棟木をへし折り大黒柱の横の地中に突き刺さっていたが爆発しなかった。怖いもの見たさに掘り出すのを見ていたが、兵隊がきて、信管を取り外して馬車に積んで国道1号線沿いの土手の部分へ埋めておいたが、最近NTTが地中ケーブルをいけるのに発見され、守山の自衛隊によって撤去された。その外8発ぐらいの爆弾が縄生字板橋地内の水田へ落下し、大きなすり鉢状の穴をいくつもあけた。2発続いて爆発していた所は、25mプール程の大きさで、それ以後ちょうど子供などの水泳の場所となっていた。落ちた当時、いくら深く潜っても底へ足が届かなかった。

その後、昭和35年の耕地整理で埋め立てられ戦争の名残りはなくなった。